HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | 知的探究と治療セラピー ： ヒューム認識論の背後にあるテーマを巡って |
| 著者 | 鵜殿，憩; UDONO，Kei |
| 引用 | 北海学園大学学園論集(184)：85-95 |
| 発行日 | 2021-03-25 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

# 知的探究と治療（セラピー）

## ―― ヒューム認識論の背後にあるテーマを巡って ――

鵜　殿　　憩

### Abstract

This paper examines whether Hume's epistemology has adopted a 'therapeutic' approach in the tradition of the ancient Pyrrhonian scepticism that pursues "the peace of mind" and escapes from any conflict of opinions. I point out the problem of Louis Loeb's (2010) interpretation that therapeutic practice is the theme which underlies Hume's epistemology. In contrast to this therapeutic reading, I view Hume as a philosopher who seeks a new undertaking, finds enjoyment in it and never shrinks from taking risks, rather than pursuing a cure for mental fatigues and frustrations.

### はじめに

18 世紀スコットランドの哲学者ヒュームは，彼の主著である『人間本性論』第一巻（「知性について」）および『人間知性研究』[1] において，人間の知識の本性・起源・範囲を問う認識論的議論を展開している。彼は，単純な印象から複雑な観念，抽象的な観念が形成される過程についての説明から議論を開始し，さらに人間の知性による判断の仕組みについての精緻な分析を与えている。また，その分析に基づいて，理性や感覚能力に対する根本的な疑いへと至っている。ヒューム研究の伝統において，彼の哲学体系は「理論哲学」と「実践哲学」とに大きく分けられ，『人間本性論』第一巻および『人間知性研究』の議論は，一般に彼の理論哲学の中心的な議論を成すと考えられてきた。しかし，人間の認識能力についてのヒュームの高度に思弁的な議論は，「人間はどう生きるべきか」あるいは「我々は何をすべきか」といった問いから明確に分離されている訳ではない。ヒュームのいわゆる理論哲学を，生き方や行動指針に関する実践哲学的な問いとは切り離されたものとして扱うことが，むしろ解釈の幅を狭めてしまい，彼の哲学体系の本質的な特徴を理解することを妨げているのではないかという疑念が生じてくる。

近年，ヒュームの認識論の思弁的側面を過度に強調する一面的な見方から脱却し，そこに人間の良い生き方についての指針を与えるという実践的なテーマが埋め込まれている可能性を探求する動きが始まっている。例えば Louis Loeb（2002，2010）は，ヒュームの認識論を「心の平静」

に最上位の価値を置くピュロン主義の伝統を引き継ぐ哲学的アプローチであると解釈する。

こうした研究の動向に刺激を受け，本論文は，ヒュームの認識論の背後にある実践的なテーマについて検討するために，テキストの包括的な見直しを実施する。出発点として，心の平静を得ることをヒューム認識論の背後にある根本的な主題と見なすLoebの研究に焦点を当て，その問題点を洗い出す。本論文での考察を通じて，ヒュームの認識論が，生き方や行動指針に関する実践哲学的な問いを内包しつつも，それは精神的安らぎを求める消極的・受動的な性格の議論というよりはむしろ，知的探究の楽しさを享受し，知性を陶冶すべく，時に労苦を自身に課すことを奨励する，積極的・能動的な性格の議論であることが明らかとなるだろう。

## 1．ピュロン的懐疑論と治療的目的論

### 1.1. 究極目標としての心の平静

ヒュームによる人間の知識や認識能力についての議論は，『人間本性論』第一巻および『人間知性研究』を中心に体系的に展開されているが，この二つの著作において完結している訳ではなく，他の著作の中でも展開されている。その精緻な論理構造については，国内外で研究成果が蓄積されている（cf. Fogelin, 1985, Garrett, 2002，久米，2005）。さらに，その背後にある隠れたテーマや歴史的位置づけに関しても，近年，特色のある研究成果が提出されている。ヒュームの認識論を古代のピュロン主義と比較し，両者に共通する治療的な性格[2]を読み込むLoeb（2002，2010）の解釈がその代表的な例である。以下では，Loebによる解釈の検討を起点に，ヒューム認識論の豊かな問題性を照射する新しい解釈の可能性を探究する。

Loebは，著書 *Stability and Justification in Hume's Treatise*（2002）の序章において，ヒュームの認識論を歴史的な文脈に位置付け，信念の正当化の基準を信念の安定性に求める[3]ヒュームの議論が，心の平静を追求するピュロン主義の伝統を引き継いでいるとする興味深い解釈を提示している。本節では，まず焦点となる「ピュロン主義」とはどのようなものかをLoebの解説に沿って簡単に概観する。

ピュロン主義は，ヘレニズム時代の哲学者ピュロンが始めたとされる懐疑主義の学派であり，学説ではない生き方としての哲学の特徴を持つとされる。彼らが推奨する実践とは，物事を肯定も否定もせず，判断を留保することで心の平静を保つことである。代表的なピュロン主義者セクストス・エンペイリコスは『ピュロン主義哲学の概要』において，次のように述べている――「判断の保留は，我々がいかなる事柄も否定も肯定もしないことによる心の安らぎの状態である」(PH 1.10)[4]。さらにセクストスは，ピュロン主義者が心の平静へと到達するに至る道筋を次のように説明する（PH 1.26）――「…懐疑論者はもともと，諸々の表象を判定して，そのいずれかが真であり，いずれかが偽であるかを把握し，その結果として平静に到達することを目指して，哲学を始めたのであるが，結局，力の拮抗した反目のなかに陥り，これに判定を下すことができないために，判断を留保したのである。ところが判断を留保してみると，偶然それに続いて彼を訪れたの

は，思いなされる事柄における無動揺〔平静〕であった」（PH 1.26）。懐疑論者は真理を判別することによって意見の対立を解消し，平静に到達する見込みを持って探究を開始したが，彼は，対立する意見は同等の説得力を持っていることに気付き，決定的な判断を下すことができないでいた。折しも彼は期せずして，自らが求めていた混乱から免れた心の状態に達したのであった。以上がセクストスによる懐疑的実践の描写である。次節では，セクストスのピュロン主義がヒュームの認識論的議論とどのように関わるのかについての Loeb の解説を詳しく見ていく。

### 1.2. ヒュームのピュロン主義批判の解釈を巡って

『人間知性研究』第十二章において，ヒュームがピュロン主義と同じ議論の土俵に立って，心の平静へと到達するに至る道筋を探る議論を展開している，と Loeb は説明する。ピュロン主義は全面的な判断留保が心の平静に至る唯一可能な経路であることを主張する。これに対して，ヒュームは，心の平静にどのようにして辿り着けるかという問題意識をピュロン主義者と共有しつつも，全面的な判断留保を心の平静に至る唯一の経路とみなすことを以下の二つの論拠から否定した，と Loeb は主張する。第一に，人間は何かを信じざるを得ないため，ピュロン主義者の要求は実行不可能である。第二に，判断停止の状態において，二つの意見は互いの効力を相殺し合うどころか，心のうちに留まり，対立を続け，心は一層不安定となる（Loeb, 2002: 7–9）。

以上の Loeb によるヒュームの反ピュロン主義的議論の再構成のうち，第一の論点は，『人間知性研究』第十二章においてヒュームが明示的に展開している議論と合致する。ヒュームは，判断することが人間の活動における最も顕著な特徴であるので，判断留保の要求は不合理であることを説いている（EHU 12.1.2）。第二の論点は，ヒュームが明示的に述べていないにも関わらず，Loeb がテキストのうちに読み込むものである（Loeb, 2002: 7; Loeb, 2010: 135）。彼はヒュームの議論を次のように理解する。ピュロン主義者たちによる判断の停止の要求は，判断の停止が心の平静をもたらすという想定から生じるが，判断停止の状態において，二つの意見は互いの効力を打ち消し合うどころか，心のうちに留まり続け，そうして意見が定まらないことは，心にとって耐え難い状態である。それゆえ，判断停止は，心に苦痛と混乱をもたらす（Loeb, 2002: 9; Loeb, 2010: 136–137）。

さらに Loeb は，懐疑および判断の留保は心を不安定にするため，認識論的に望ましくない心的作用であるという主張をヒュームに帰属させる。彼のこのような理解は，ヒュームが，「思考に変化をもたらすことが疑いの本性」であり，疑いは「不安定と不一致」を我々の観念にもたらす（THN 2.3.10.12）とする一方で，信念は「心におけるある特定の観念を固定化し，対象の選択において観念が揺れ動かないまま保持する」（THN 2.3.10.12）と述べていることに基づいている。「疑い」は不安定な，「信念」は安定した心の状態であり，「不安定であることは不快である」（THN 2.3.9.27）という記述は確かに存在し，ヒュームは「信念」を「疑い」とは異なる心的状態ないし態度として特徴づけている[5]。また，信念は安定化の力ゆえに「安らぎと休息」へと我々を導く

ことが可能であり，疑いから信念へと移行することは，「心に満足と快楽を与える」（THN Appendix 4）と彼は述べている。これらのテキストは疑いや判断の停止が望ましくないものであり，日常的信念に留まることが望ましいことであるというヒュームの考えを顕著に示しており，このような思考方法は，心の平静への到達に至高の価値を置く議論の枠内においてのみ理解可能であるとLoebは解釈する。

### 1.3. ピュロン主義解釈の問題

Loebによる解釈は斬新かつ大胆であるが，同時に，検討を要するものである。彼は「ピュロン的懐疑論者の主要な特徴は，信念を停止することが心の平静への唯一の経路であるという主張にある」（Loeb 2002: 7）と述べ，懐疑論者が判断を停止し，それに続いて平静がもたらされた（PH 1.31）というセクストスの記述を引用する。ここでのLoebによるセクストスのテキストの解釈が正しいかどうかは疑問の余地がある。セクストスのテキストにおいては，心の平静が，偶然にも判断の留保に続いてもたらされたと述べている。しかし，そこでは平静が判断の留保以外の経路からもたらされる可能性が排除されているかどうかについては何も述べられていない。懐疑論者は心の平静を得るという上位目的のために，真理に到達するという目的を断念したのだろうか。懐疑論者にとっての判断留保は，誤りを避ける試みであるので，そうした実践において真理への関心は維持されており，彼らは真理の探究を断念せず，継続しているという理解の方がより適切であろう（山口，1989；山口，2002；Perin, 2006）。懐疑論者の究極の目的が心の平静であるとしても，そのことによって彼らが真理の探究を断念したということにはならないのである。

Orsan Oymen（2012: 58）によれば，ピュロン主義者が停止を要求するのは，我々を真理から遠ざける独断的な判断であり，ピュロン主義者の言う「ドクサ（思惑）」は，信念や意見全般ではなく，合理的な根拠を欠いた信念や意見のことである。したがって，ピュロン主義者が一切の信念を排除しようとしたということは事実ではない。

次に，ヒュームのテキストの中でのピュロン主義の特徴づけについて考えたい。『人間知性研究』第十二章において，ヒュームは仮想上の哲学的立場として「ピュロン主義」に批判を加えている。しかし，彼が批判の対象としている議論は，セクストスの著作に記述されるピュロン主義の議論そのものというよりは，その主要な特徴を維持しつつ，彼自身の議論の目的のために再構成された議論である。例えば，ヒュームは帰納的推論や外的対象に関する信念に対して提起されうる懐疑的な議論を引き合いに出して，それをピュロン主義者が提起する議論の一形態とみなしているが，それはセクストスの著作に現れるピュロン主義者による議論には含まれない議論である。それゆえ，ヒュームが考察の対象とするピュロン主義は，セクストスのテキストの厳密な読解から抽出されたものではないことは踏まえておかなければならない。ヒュームにより再構成されたピュロン主義の議論を歴史上のピュロン主義と厳密に重ね合わせて考えようとすることは誤った解釈への誘因である。

## 2．懐疑の認識論的重要性

### 2.1. 懐疑の建設的な活用

『人間知性研究』第十二章において，ヒュームはピュロン主義（先述したように，セクストスの著作に現れるピュロン主義と厳密に同じではない）を一切の信念を無効なものとする「過激な懐疑論」として位置付ける。以下では，ヒュームがLoebが述べるように，懐疑を心の平静の観点から望ましくないものとして捉えているのかどうか検討する。

ここで私が注目したいのは，『人間知性研究』第十二章において彼が自身の最終的な立場として「緩和された懐疑論 mitigated scepticism」[6]の立場を採り，懐疑の建設的使用を認めているという事実である。緩和された懐疑論は，自らの認識の誤り易さを踏まえ，適切な主題を選択しながら慎重に哲学的思索を行うことを要求する。また，自らの意見の正しさを過信せず，反対意見に対して寛容であることを要求する（E 12.24-28）。懐疑や判断留保を肯定的に捉える「緩和された懐疑論者」としての態度は，ヒュームの哲学体系全般に見られ，とりわけ，自然宗教論を巡る議論において特徴的に現れる。『自然宗教に関する対話』において彼は「疑い，不確実性，判断の留保は，この主題（自然宗教）に関する我々の最も正確な探求の唯一の結果である」（NHR 15.13：補足引用者）という強い主張を行っている。このように，ヒュームが懐疑を「正しい認識へと我々を導くための手段」として捉えていることは伺える。

緩和された懐疑論が主張する内容についてLoebは次のような解釈を行うかもしれない。安定した信念を不安定な信念に優先させることであり，安定した信念とは，心に混乱をもたらさない信念のことだというものである。しかし，このような理解は間違いである。緩和された懐疑論は，安定した信念を優先的に保持すること以上のことを要求しているというのがテキストから導かれる正確な理解である。緩和された懐疑論が要求することは，判断の保留と疑いを人々が陥る独断論や不寛容な態度に対する処方として用いることである（EHU 12.25）。それゆえ，緩和された懐疑論を，信念を安定化に導くことを要求するものとして解釈することは，こうしたヒュームの説明の真意を酌み取ることに成功していない。

### 2.2. 懐疑的思考自体は否定的に捉えられているのか

ヒュームはLoebが考えるように懐疑的思考および哲学的反省全般を，心を疲れさせるだけの取るに足らない行いであるという低い評価を与えているのだろうか。また，それを中止し，日常的信念に立ち帰るべきことを主張しているのだろうか。懐疑思考が，心的負荷の強い作用であり，心に憂鬱，苦痛，疲労，不満足をもたらすことは確かである。『人間本性論』第一巻第四部においてヒュームは，哲学者たちが懐疑的思索に耽っている際の心の状態を緊張として記述し，人間本性に導かれる仕方で日常的信念に留まっている状態を安らぎとして記述している ――「我々の注意が哲学的主題に向けられている間は，哲学的な，熟慮に基づく原理が優先されるかもしれない。

しかし，我々が自らの思考の緊張を緩めるとき，自然は姿を現し，我々を元の意見へと引き戻すだろう」(THN 1.4.2.51)。ここでは，哲学的反省に伴う疲労とストレス，またそれを緩和する自然の作用について説明されている。ヒュームは「哲学的憂鬱と譫妄」(THN 1.4.7.9) という表現によって，懐疑をある種の病に例え，自身も懐疑的思索を継続し続けることに困難を感じ，安らぎと娯楽を求めることがあることを認めている。

Ricardo Wicker は，こうしたヒュームの記述に次のような含意を読み取る ――「懐疑的憂鬱に対してヒュームが与える解決策とは，難解な哲学的推論を拒絶し，生き生きとした印象，気晴らし，社交を通じて日常的信念を回復することである」(2016：41)。彼が指摘するように，ヒュームは懐疑的思索を，我々の心を煩わせる要因として記述している。それでも，ヒュームが，懐疑的思索を認識論的な意味で有害であり，それを中断することにより，我々が日常的活動や関心事に回帰することを規範的に要求している訳ではないことを，以下では，いくつかのテキストを用いながら説明する。

信念を維持する我々の自然な傾向についてヒュームは次のように述べる ――「非常に幸運なことに，自然は心の傾きを和らげることによって，あるいは何等かの趣味あるいは感覚に現れる生き生きとした印象によって私を哲学的憂鬱と譫妄から癒してくれる。こうしたことが一切の荒唐無稽な事柄を頭から消し去るのである。私は食事をし，バックギャモンのゲームをし，会話をする…」(THN 1.4.7.9)。ここでヒュームは，休養を人間が置かれるべき最も望ましい状態として述べているのだろうか。彼は気晴らしによる憂鬱な気分からの回復が自らを再び哲学的探究へと誘う様子を記述しているが (THN 1.4.7.12)，ここから，懐疑的思考そのものを否定的に捉えるニュアンスを読み取ることは決してできない[7]。

ヒュームのテキストにおいて「安らぎ」は，常に望ましいものであり，それと対比される「緊張」は取り除かれるべきものと考えられているのだろうか。より正確に言えば，ヒュームが要求することは，活動の強度を我々が置かれた状況に応じて調節することである[8]。彼は次のようにも述べている。複雑さや難解さ，知的刺激を許容できる資質・強度を持った哲学者は，彼らが疲労困憊するまで，難解な哲学的思索を継続してよい ――「そのような探究は，苦しく骨が折れるように思われるかもしれないが，それはある種の心にとって心地よいものである。それは元気で健康な体が苛酷な訓練を必要し，大部分の人々にとって面倒で苦しいと思われることから快楽を得るのと同様である。」(EHU 1.10)。知的な忍耐力を持つ者にとって，謎や不明瞭さは，苦痛をもたらすという理由から避けられるべきではなく，むしろ積極的に受け入れるべきである ――「不明瞭さは，目にとってと同様に心にとって苦しいものである。しかし，どれほどの労力によるにせよ，不明瞭さから事物の本来のあり方を明らかにすることは楽しく喜ばしいことに違いない」(EHU 1.10)。必要とされる休息の量は，苦痛に対する耐性などを含む個人の資質や状況に応じて変化すべきである，というのがヒュームが述べていることである。

## 3．懐疑的態度と活動性

### 3.1. ヒュームによるピュロン主義批判の再解釈

本節では，ヒュームがLoebの解釈とは異なり，人間が置かれるべき望ましい状態を，不安や苦痛からの解放ではなく，活動のうちに位置づけていることを説明する。

『人間知性研究』序論において，ヒュームは「人間はまた，活動する存在であり，この傾向，ならびに人生の様々な必要性から，人間は実務や仕事に従事せざるを得ない」（EHU 1.6）と述べ，行為することが人間にとって不可欠であることを説明している[9]。活動的であることは人間本性にとって本質的であり，究極的には，人間の思索的側面すらも，人間の活動的側面の一つの現れとしてヒュームは捉えている。『人間知性研究』第九章においてヒュームは，哲学者のような高度に抽象的な概念を用いながら思索する人が，一般人と同じように，人間本性によって突き動かされ，活動に従事するように傾向づけられていることを説明する（EHU 9.5）。また，『自然宗教に関する対話』においては，哲学者の行う理論的な推論が，幼児が，生活の様々な場面で無意識のうちに用いている実践に関わる一般的原則を，より規則的で系統立ったものに発展させたものである，と述べている[10]。

哲学者が行う推論や思索の行為としての側面を無視して，その認知としての側面だけに注目するべきでないという論点は，しばしば看過されるが，ヒュームのピュロン主義（『人間知性研究』第十二章において，それは「過激な懐疑論」として特徴づけられる）に対する哲学的反論の根底にあるものである。ヒュームが再構成するピュロン主義の議論は，事実や真理に関する判断の停止を要求する。しかし，判断することは日常的行為と連続的であるため，判断停止の要求は，行為すること自体の停止の要求へと派生していく。ピュロン主義の原理が「普遍的で安定した支配力を持つ」ならば，人々は「飽くなき自然の必然性が彼らの惨めな存在に終焉をもたらすまで，完全に不活動の状態に留まるだろう。」（EHU 12.23）とヒュームは指摘する。彼が不活動の状態にある人間を，惨めな存在として言及していること，そして彼が活動を人間の心身が置かれるべき適正な状態として捉えていることは，Loebや他の研究者たちの解釈においてほとんど無視されている[11]。

### 3.2. 苦痛に対して寛容であることの認識論的重要性

懐疑的態度を主要な特徴とする哲学的思索活動は，不確実性を楽しむという側面を持ち，既存の信念を不安定にし，一定の精神的苦痛をもたらしつつも，高次の幸福への導きとなるとヒュームは考える。ヒュームは人間の知的生活の活動的な側面を強調する。そして，それを人々が新しいことや困難なことに挑戦する際に不可避的に伴われる苦痛を許容する寛容さの観点から記述する。例えば『人間本性論』第二巻において，ヒュームは新奇な対象に我々が遭遇する際に経験される不快な感情について言及している（THN 2.3.9.26）。人々は新奇な対象の予期せぬ出現に戸

惑い，一時的な苦痛を経験する。新しい未体験の状況における不確実性が，恐れや不安を与えることはよく知られた状況である。ヒュームは結婚式の初夜に，大きな喜びの経験を期待しつつも，恐れと不安を抱きながら床に就く処女の例を挙げ，不確実性の高い状況下において新しいことに挑戦する際に経験される精神の動揺を受け入れるべきものとして説明する（THN 2.3.9.29)。

人々が複雑性や新奇性などの刺激を受け入れる際に，苦痛や不安を乗り越えなければならないという状況は確かに存在する。同じ状況は，人々が知的活動においても生じる。新しい情報，疑問や問題に直面する際に人々は一定の苦痛を乗り越える必要がある。ヒュームは，哲学的思索活動と，狩猟やゲームなどの自己充足的な活動の類似関係について語っている（THN 2.3.10.8)。二つはいずれも，結果の不確実性や意思決定の難しさを楽しむ側面がある。我々が活動の内発的な楽しさを追求している際には，活動に伴われる困難や苦痛は，活動の喜びの主たる源泉である。たしかに，活動が人々を疲れさせ，人々が時に休養を必要とすることもある。しかし，一切の不活動の状態よりも，人が休養を挟みながら何等かの活動に従事する状態の方が，人間にとってより望ましいのである。

### 3.3. 苦痛に対して寛容でないことの認識論的有害性

苦痛に耐える力を欠き，活動を停止することによって苦痛を避けようとすることは認識論的に望ましくない心の状態である，とヒュームは考える。合理性を追求する懐疑的哲学の効用はそのような状態に心が陥らないようにするべきであることをヒュームは次のように説明する ――「心が無気力で怠惰であり，横柄で傲慢であり，迷信的で騙されやすいとき，それとまったく正反対であるのは，哲学をおいて他にない」(EHU 5.1)。迷信や偏見を打破し，勤勉で批判的な心の働きを取り戻すことは懐疑的思考に期待されている建設的な役割である。

苦痛への忍耐を欠いた心の状態をヒュームは望ましくないものと考える。ここでの彼の考え方を，現代心理学における「認知的不協和」の理論に近づけて理解する研究もある (Beckford, 2011)。認知的不協和とは，人々が自身の望んでいない情報に出くわすときに，不快を感じ，その情報を無視したり，拒絶する理由を探すことによって矛盾を解消しようとする状態を指す。これと対応すると思われる状態についてのヒュームの記述は以下の通りである ――「躊躇したり，（対立する意見を）天秤にかけたりすることは，彼らの知性を当惑させ，彼らの情念を阻害し，彼らの行為を中断させる。彼らは，それ故，自らにとって非常に不快な状態から脱するまで我慢ができない。また彼らは，自らの信念に対する断定の激しさと，彼の信念の頑固さゆえに，そうした状態から十分には離れることができないと考えている」(EHU 12.24：補足引用者)。独断主義者が陥る心理状態は，まさしく認知的不協和の状態であり，こうした非合理性への処方としてヒュームは懐疑的態度，すなわち自らの考えに対する反対証拠の受け入れる寛容で批判的な態度を奨励する。知的活動は不快な経験を不可避的に伴うが，そうした苦痛に耐えることを彼は要求しているのである[12]。

## おわりに

本論文においては，知識や認識能力についてのヒュームの理論的考察が，望ましい生き方についての実践哲学と深く結びついている，という解釈の可能性を探究した。Loeb の解釈とは異なり，ヒュームは苦痛と混乱を免れた精神の安定した状態を目指すよりも，そのような安定性を崩すほどの不安や苦痛に耐えることを目指すことの方が認識論的により重要であると考えていた，というのが私の最終的な理解である。苦痛を不可避的に伴う知的探求活動の推進に至高の価値を置くヒュームの認識論において，苦痛や不安をもたらす懐疑的思考を避けるべきであるという規範的要求は存在しないということを本論文では様々な角度から論じた。懐疑的思考は疲労と憂鬱をもたらすとしても，個人の精神がそれに耐え得る強度を持つ場合，それを中断すべきではない，という実践的主張がヒュームの認識論の根幹となっていることについては，今後，より詳細に説明していきたい。

## 注

[1] ヒュームの各著作の参照は，その著作の略記号の後に，巻や部，節の段落番号を示す。

[2] John Immerwahr（1989）は，主に『道徳・政治・文学論集』におけるヒュームの哲学の治療的性格について言及している。

[3] この点は Loeb によって強調されているが，一般に支持されている解釈では必ずしもない。

[4] 古代ギリシアのピュロン主義者は，懐疑を医療実践の一部として捉えていたと言われる。セクストスもまた経験主義学派に属する医師であった（Fosl, 2015: 39）。現代の文脈において「治療としての哲学」という考え方は，一般にウィトゲンシュタイン的なアプローチとして言及される。『哲学探究』において，ウィトゲンシュタインは「哲学者が疑問を処理する仕方は，（医者が）病気を処理する仕方と似ている」（PI 255：補足引用者）と述べており，哲学の目的が，哲学者の知性が陥るある種の病（言語形式に対する誤解から生じる幻想や混乱）を治療することであるという考えを示している。こうした治療的アプローチを古代のピュロン主義の再現・拡張とみなす研究もある（cf. Smith, 1993）。

[5] ヒュームは次のように述べている。何かを信じているとき，「心は…それ自身を一つの確立された結論に固定化し，そこに落ち着かせる」（THN Appendix 4）。一方で，何かを疑っているとき，心は不安定な状態になる（THN Appendix 4）。

[6] 『人間知性研究』において現れる「緩和された懐疑論」は，ヒュームが『人間本性論』において「真の懐疑論者」（THN 1.4.7.14）や「真の哲学者」（THN 1.1.4.6）と呼ぶ者たちの立場とも対応する。

[7] 『人間本性論』第三部において，ヒュームは，活動を幸福のための不可欠な構成要素と見做す議論を行っている。ヒュームの考えでは，休息が価値を持つのは，あくまで活動を促進する手段である限りにおいてである。彼は「安逸は，もしそれが極端である場合には，非常に大きな欠点であることが常に認められている」（THN 3.3.1.24）と述べている。同様の論点は，『道徳・政治・文学論集』にも現れる――「安逸や休息は，それ自体としては我々の楽しみに寄与しないように思われるが，しかし，それは睡眠と同様に，仕事や快楽が絶え間なく続くことが耐えられないという人間本性の弱点に対する恩恵として必要である」（ESY: ‘Of Refinement in the Arts’ 3：強調引用者）。安逸は，多くの人が乗り越えられない怠惰という弱点のために行われる譲歩であり，本来的に望ましいものではないとヒュームは捉えている。

[8] この論点は，セクストスの著作に現れる歴史上のピュロン主義の論点とも重なる。このことからも，

ヒュームの立場と歴史上のピュロン主義の立場には重複する部分があるという Oymen の指摘が裏付けられる。

[9] 同様の考え方は，ヒュームの政治・経済・社会思想にも顕著に現れる。ヒュームは「人間精神の持つ渇望や要望のうち，行為し，活動する欲求ほど持続的で飽くことのないものはない。そしてこの欲求は我々の情念と活動のほとんどの基盤であると考えられる。」(ESY: 'Of Interest' 11) と述べている。Robert Fogelin (1985) によれば，『道徳・政治・文学論集』における多くの議論は，『人間本性論』におけるヒュームの哲学的立場を反映していない。また，Immerwahr (1989) によれば，二つの著作の記述スタイル及び目的は異なっており，前者では人間本性の解明という理論的な作業がなされているが，後者では人間の生き方，社会のあり方についての実践哲学が展開されている。『人間本性論』におけるヒュームの哲学は，『道徳・政治・文学論集』における政治・経済・社会思想と共に，活動的な主体としての生き方を理想とする彼の実践哲学を形づくっていると本論文は考えるが，そのことによって『人間本性論』と『道徳・政治・文学論集』が完全に連動し合っていると主張することまでは意図していない。

[10] 『自然宗教に関する対話』において，ヒュームの立場を代弁する懐疑家フィロは次のように主張する――「誰もが日常生活においてさえ，多かれ少なかれこのような哲学 (自然的あるいは経験的主題に関する哲学) を持つように制約されている。我々が最も幼い幼少期以来，行為や推論に関してより一般的な諸原理を形成するために不断の努力を行っている。…我々が哲学と呼ぶものはこれと同じ種類のものが，より規則的で方法論的な働きとなったものにすぎない。」(DNR 1.9)。

[11] ヒュームが『人間知性研究』において批判の対象としているピュロン主義とは，自身の「緩和された懐疑論」と対照的なものとして位置付けられる想像上の学説のことである。しかし，すでに述べたように，セクストスの著作に現れる歴史上のピュロン主義者が一切の信念を否定したかどうかについては疑問の余地がある。セクストスのテキストにおいて，懐疑論者は心の平静を追求しつつも，真理の探究を放棄しておらず，一切の判断が停止されるべきであるとも考えていないとみなす解釈も多数存在する。ヒュームは緩和された懐疑論とピュロン主義を対比させるが，両者の立場が非常によく似ていると指摘する研究者もいる (Oymen, 2012: 59)。

[12] 論説「商業について」においてヒュームは，高い判断能力を持った「深淵な思想家」が，「群を抜いて最も珍しく…そして最も有用かつ貴重」であり，彼が述べることについて「理解することが一定の苦痛を要するとしても，人は何か新しいことを聞くことの喜びを得る」(ESY: 'Of Commerce' 1) と述べている。

## 省 略 記 号

著作は，その略記号の後に，慣例に従い，巻や部，節の段落番号を示す。

ヒュームの著作


［THN］ Hume, David. 2000. *A Treatise of Human Nature*. Eds. David Fate Norton and Mary J. Norton. Oxford: Oxford University Press.

［EHU］ Hume, David. 1999. *An Enquiry Concerning Human Understanding*. Ed. Tom L. Beauchamp. Oxford: Oxford University Press.

［EPM］ Hume, David. 1998. *An Enquiry Concerning the Principles of Morals*. Ed. Tom L. Beauchamp. Oxford: Oxford University Press.

［NHR］ Hume, David. 1993. *The Natural History of Religion*. Ed. J. C. A. Gaskin. Oxford: Oxford University Press.

［DNR］ Hume, David. 1993. *Dialogues Concerning Natural Religion*. Ed. J. C. A. Gaskin. Oxford: Oxford University Press.

［ESY］ Hume David. 1985. *Essays: Moral, Political and Literary*. Ed. Eugene F. Miller. Edinburgh:

Liberty Fund.
セクストス・エンペイリコスの著作
［PH］　Empiricus, Sextus. 2000. *Outlines of Scepticism*. Translated by Annas, Julia and Jonathan Barnes. Cambridge: Cambridge University Press.
ウィトゲンシュタインの著作
［PI］　Wittgenstein, Ludwig. 1953. *Philosophical Investigations*. Eds. G. E. M. Anscome and R. Rhees, Translated by G. E. M. Anscome. Oxford: Blackwell.

## 参 考 文 献

Beckford, James. 2003. A. *Social Theory and Religion*. Cambridge: Cambridge University Press.
Fogelin, Robert J. 1985. *Hume's Skepticism in the Treatise of Human Nature*. New York: Routledge and Kegan Paul, 1985.
Fosl, Peter. 2015. 'Cavell and Hume on Skepticism, Natural Doubt, and the Recovery of the Ordinary.' *Conversations: The Journal of Cavell Studies*, 3: 32–48.
Garrett, Don. 2002. *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*. New York: Oxford University Press.
Immerwahr, John. 1989. 'Hume's Essays on Happiness.' *Hume Studies*, 15 (2): 307–324.
久米暁 2005『ヒュームの懐疑論』岩波書店。
Loeb, Louis. 2002. *Stability and Justification in Hume's Treatise*. New York: Oxford University Press.
———. 2010. *Reflection and the Stability of Belief: Essays on Descartes, Hume, and Reid*. New York: Oxford University Press.
Oymen, Orsan. 2013. 'Hume and Pyrrhonisim' In Kasavin, I. T. *David Hume and Contemporary Philosophy*. Cambridge Scholars Publishing: 53–62.
Perin, Casey. 2006. 'Pyrrhonian Scepticism and the Search for Truth' Oxford *Studies in Ancient Philosophy,* 30: 337–360.
Plant, Bob. 2005. *Wittgenstein and Levinas: Ethical and Religious Thought*. New York: Routledge.
Smith, Junqueira Plínio. 1993. 'Wittgenstein and Pyrrhonism: On the Nature of Philosophy.' Translated by Israel Vilas Bôas, *Analytica*, 1 (1): 153–86.
〈http://philosophicalskepticism.org〉 Web: 31 July 2016.
Wicker, Ricardo. 2016. 'Hume's Solution to Sceptical Melancholy.' MA thesis. Université du Québec à Montréal, *Archipel-UQAM*.
〈https://archipel.uqam.ca/8837/1/M14404.pdf〉 Web: 22 Dec. 2016.
山口義久 1989「懐疑主義のパラドクス」,『人文学論集』（大阪府立大学人文学会編）第七集，35–52 項。
——— 2002「懐疑の哲学的意義」,『アルケー』（関西哲学会編）第 10 号，16–28 頁。

『北海学園大学学園論集第 184 号』鵜殿憩「知的探究と治療（セラピー）: ヒューム認識論の背後にあるテーマを巡って」(pp. 85-95)

# 正誤表

下記の通り訂正いたします。

| 箇所 | 誤 | 正 |
|---|---|---|
| p. 86, l. 30 | (PH 1.26) | 削除 |
| p. 87, l. 1 | (PH 1.26) | (セクストス 1998: 20) |
| p. 95 の参考文献 | | （追記）セクストス・エンペイリコス 1998『ピュロン主義哲学の概要』金山弥平・金山万里子訳、京都大学学術出版会。 |